月刊 Acanthus
（土浦一高・土浦中学とその周辺の物語）
第１２４号　令和元年６月１１日
茨城県立土浦第一高等学校
進修同窓会旧本館活用委員会
ＨＰ　http:www.sin-syu.jp/

杉田氏が古仁廣先生と勤務された大麻里公学校
（昭和 14 年３月 18 日、第 31 回卒業記念）

台湾の小学校～敷島小学校（国民学校）・台東鎮文化国民学校～

つくば市臼井の故杉田市郎氏（元筑波町史編纂専門委員）は、40年の教員生活の中での 1937（昭和 12）年から 1946（昭和 21）年までは、台湾（1895（明治 28）年から 1945（昭和 20）年まで日本領）で教鞭を執られ、大麻里公学校、太武小学校、敷島小学校、台東鎮文化国民学校に勤務されました。その台湾での教員生活の一端を綴られた『台湾の思い出』から抜粋させていただきました。

文中の【　】内は筆者による注記です。

古仁廣先生

日本領であった当時の台湾には、内地人の子弟が就学する小学校と現地人の子供達が就学する公学校とは、別々に存在していました。しかし、その地域の有力者の子弟が、内地人と同じく、小学校に就学した例も見られました。20歳代の10年間を台湾の教員として勤めましたが、今【平成10年】でも、担任した日本人・現地人双方の児童達や現地出身の友人との温かい交流が続いていて、台湾にも度々出掛けています。

1937（昭和12）年、最初に赴任した大麻里公学校でお世話になったのが、古仁廣（日本名吉村廣）先生。彼は私より６歳ほど年上でした。台湾の先住民族であったピューマ族の出身でしたが、台湾師範学校卒業の先輩教員であり、新採で勝手の分からない私にとっては、この上も無い指導者でした。彼とはその後、２年間、同じ官舎に住み、同じ釜の飯を食う、という共同生活を続けました。その間に、民族や生活習慣の違いを超え、お互いに尊敬し、信頼し合える心の繋がりが育まれ、終生の友としての交わりが深まりました。

敷島小学校（国民学校）

1939年４月から８月までの１学期間だけ太武小学校に勤務した後、９月に、台東にあった敷島小学校に転勤となりました。敷島小学校は、日本からの農業移民村に開かれた小さな学校でした（1941年３月、「台湾教育令」の改正により国民学校に改変される。）。

満州や蒙古には、満蒙開拓団などと言って、日本人の農業移民村が次々に創られていったことは知っていましたが、台湾にも日本人の農業移民村が創られていたことを私は全く知らなかったので、びっくりしました。満蒙開拓とは違い、日本の領土内に、日本政府の創った農業移民村でしたので、その入植条件は良いものでした。１戸当たり４町歩の耕地の無償配付と、生活の基盤となる住宅、水道設備、学校、診療所、医者の配置、マラリヤ防疫所、通学路の設置なども、台湾総督府の手で準備されていたので、満蒙の農業移民に比較すると、数段恵まれたものでした。

私の勤務していた学校は、総戸数60数戸の村にあり、児童の数もそれほど多くはなく、１年生から高等科２年生まで合わせて、60～70名だったと思います。それが１・２年生、３・４年生、５・６年生、高等科１・２年生と、４つの複式学級編成になっていたので、職員も学校長を含めて、４名でした。私は、この学校に1945年の６月まで、５年10ヶ月も勤務したので、この学校の教職員としては、最長の勤務者だったようです。ただし、この村には茨城県から入った家が１戸もなく、ちょっと寂しい気がしましたが、隣県千葉の人達が何戸も入植しておられたので、それらの家では、隣県出身の先生だとの近隣意識も手伝って、皆さん親しくしてくださって、私が自炊生活をしているのを知ってか、「先生、今夜は私の家に飯食いに来いや。」などと、誘ってくださる家も出てきました。

学校長以外の職員は、３名とも独身でしたが、その中の川端先生が結婚されたのは、1940年の春でした。先生は和歌山県のご出身、奥さんも同郷の人でしたので、結婚式は郷里和歌山で挙げられました。先生が奥さんを連れて敷島に帰られたその日の夕方、奥さんは官舎に電灯の無いことに初めて気付かれたようでした。この頃の台東では、市街地以外には殆ど電灯の無い、石油ランプの生活でした。官舎に電灯の無いことを奥さんに話せなかったという先生のお気持ちは、私にもよく分かりました。学校官舎は１棟２戸建でしたので、私は隣の新婚さんの生活に気を遣いました。しかし自炊生活でしたので、ご馳走の差し入れは有難く、遠慮無く頂戴しました。気さくな奥さんは、「お手洗いをよく掃除すると良い子に恵まれるそうです。」と言いながら、私の官舎のお手洗いまで掃除してくださいました。

川端先生は、長女の賀代子さんがお生まれになると、台東小学校に転勤になり、そのうち二女の渥子さんもお生まれになりました。敷島から台東までは３～４kmでしたので、私は、日曜日にはよく出掛けて行きました。時には土曜日の午後からお邪魔して、そのまま泊まってしまうこともありました。食事時になると、奥さんは当然のような顔をして、「賀代子、杉田先生のお茶碗出して。」と声を掛けるのです。奥さんは、家族同様に私の食器類一式を用意しておいてくださり、賀代ちゃんもそれを知っていたのです。先生が承知されていたことは勿論のこ

敷島小学校の児童達
子供達の後ろにある植物は航空燃料に混入する油を採った「ヒマ」

前の写真に写っている前列左から3番目に、姓名ともはっきりと記憶している女の子がいます。その子の名は佐藤昌子さん。お父さんは診療所のお医者さん、佐藤先生です。私のいた頃の台湾には変わった制度があって、軍隊の古参衛生下士官や保健所の永年勤続職員などから選抜して、「現地開業医」の資格を与え、総督府の指定した地域内での医療行為を認めていました。台湾における田舎の公医さんには、そんなお医者さんが多かったのです。

その頃の台東地域の農作物は、先ず第1は甘蔗でした。甘蔗とは、砂糖を作るサトウキビのことで、キビ畑は、刈り取りの頃になると、ススキのような白い穂が、一面に出てきて美しい。その間を網の目のように甘蔗運搬の軌道が走っていて、ひっきりなしに甘蔗を運ぶ軽便鉄道が行き来していました。子供達は、最後尾のトロッコの台車から甘蔗を引き抜く競争をしていました。取り入れ時季の懐かしい風景で、今でも目に浮かびます。

ブルブル疎開学園、終戦

1944年になると、台湾の各都市もアメリカ軍の爆撃を受けるようになり、台東庁でも、奥地のブルブルに疎開学園を開いて、希望者を収容するようになりました。川端先生もそこへの派遣を命じられ、家族と赴任されました。1945年には、疎開学園でも、ある程度の食糧自給を考えるようになり、農業経験のある教員を、ということで、私もブルブルの疎開学園に派遣されました。また川端一家の近くで生活することになりましたが、間も無く終戦となり、台東鎮文化国民学校に戻りました。

終戦で台東に戻ったものの、我々独身者には大変な生活となりました。何より毎日の食事に困りました。以前には食堂と契約するか、寄宿舎の炊事の方に頼んでおけば、どうにか事足りていました。しかし、戦後は、食堂や寄宿舎が無くなり、自炊をしようにも、食材の入手や調理を考えると、簡単な問題ではありません。それでも私は、川端先生ご夫妻のご厚意で、同僚達が羨むような生活が出来たのでした。

台東鎮文化国民学校

終戦後、中国国民党軍が進駐し、学校も中国側に接収されました。私は、台東鎮文化国民学校に勤務することになりました。この学校は、私が在職していた台東国民学校と台東宝公学校とが合併して出来た学校です。教職員は62名で、中国大陸から来られた先生を除くと、日本籍と台湾籍とがほぼ半数ずつでした。初代校長になられたのが蒋剛先生。台東庁の教育面の接収のために大陸から来られた接管【接収管理】委員の1人で、年齢は私より少し上だったと思います。接管委員として来られたというのに、温和な人柄でした。台東鎮文化国民学校の校長になられてからも、学校の運営については余り細かい口出しをせず、特に日本人子弟の教育については、一部を除き、日本領時代の日本人前校長に任せてくれていたようです。我々日本籍の教職員も全員、新しい中国側の学校に教職員として留用されることになったので、給料も支払われたし、宿舎も従来どおりの使用が認められたので、生活面での不自由や差別は感じませんでした。加えて、中国国民党蒋介石総統の「暴に報ゆるに暴を以てせず……。」の布告も守られていたので、大陸からの帰国者のような、敗戦国民としての、言語に絶する悲哀も味わわずに済みました。

また、蒋剛校長は、どこの国でも子供の教育は1日も忽せには出来ない、と言って、歴史、地理、修身の3教科を除いては、日本の教科書による教育を認めてくれました。これは、上部の方針であったのかも知れませんが、私達にとっては有難いことでした。朝会で中国国歌を歌ったり、自分の姓を中国の発音で呼ばれて面食らったことなどもありましたが、今では懐かしい思い出となっています。

帰国

1946年、帰国の時が来て、私達台東在住者の乗船地として指定されたのは、北方の花蓮港でした。私達は、台東地区の帰国者としては早い方で、3月初めに花蓮港に到着しました。しかし折悪しく、連合国側から軍隊の移動が禁止され、花蓮港乗船地では、一般の引き揚げ日本人の援助に必要な人数の確保が、出来なくなってしまいました。そこで、「独身の男の何人かは、一般人の引き揚げ完了まで、花蓮港に残ってもらいたい。」との要請がありました。人選の結果、私も残留者の1人として指名されました。早く帰らなければならない理由も無かったので、そのまま引き受けました。

私達は、中国側から外出の腕章を貰っていて、行動の自由を割合認められていました。そこで、引き揚げ船の入港が2～3日途切れて仕事の無かった日に、私達は、花蓮港の市街に骨休めに出掛けました。集合時刻と場所とを決めた後、1人歩きを楽しんでいた私は、街角で見覚えのある顔に出会いました。この間、別れを言って来たばかりの蒋剛校長でした。先生も私の顔を憶えていてくれて、にこにこしながら近寄って来て、早口に何か話し掛けてこられました。しかし中国語を解しない私には、何を言っているのかさっぱり分かりません。私は日本語で話し掛けましたが、今度は蒋先生が分かりません。どちらもまごまごしているうちに、蒋先生は筆談を思い付かれました。そこは同文同種の間柄ですから、漢字だったら大体の意味は通じるものです。どんな漢文を書かれたのか、記憶も薄れましたが、私はそれを読んで、「どうしてここにいるのですか。まだ日本には帰れないのですか。」と解しました。私はメモ帳と鉛筆とを受け取って、「帰国日本人為引揚援助」と書きました。先生は私の書いた意味が分かったらしく、頷かれて、今度は、「どこに住んでいますか。」という意味のことを書かれました。私は「在米(倫)日僑連絡所」と書いてみました。先生はこれにも頷いてくださったので、分かったものと思います。その他にも2～3の筆談をしましたが、最後に先生は、「祈健康的無事帰国」と書かれたと思います。花蓮港の街角で偶然再会した蒋剛校長。私より少し年上の方だったと思いますが、台湾のどこかで、今もお元気でおられるのでしょうか。それから約1ヶ月、引き揚げ船の入港の日には、検査の準備と検査後の荷造りの手伝いに追われ、ようやく4月末に、つくば市臼井の実家に戻りました。

※旧制土浦中学には台湾からの留学生も学んでいた。中学15回(1916(大正5)年卒業)の涂火・涂爐の両名である。涂火は1911(明治44)年4月に第1学年に入学し、涂爐は同年9月に福岡県立朝倉中学校から第1学年に転入学した。在学中は西真鍋の一色氏と近藤氏とのご厚意により、両氏宅にそれぞれ下宿していた。両人とも健康に優れ、成績も良く、卒業後、涂火は東京高等商業学校(現一橋大学)に、涂爐は岡山医専(現岡山大学医学部)に進学し、帰国後は台湾の斯界で活躍された。1986(昭和61)年4月28日、涂爐のご遺族が本校を訪れ、涂爐の生涯を纏めた写真集『日新懐念集』を恵贈された。

(高21回　松井泰寿)